

びわこの 考湖学

19

琵琶湖の北端に、竹生島を臨む岬、葛籠尾崎がありま
す。その西の一面に、菅浦と
呼ばれる小さな集落がありま
す。琵琶湖に面した湾奥にあ
り、背後の三方を急峻な山で
囲まれて、道路のなかった近
年までは、まさに陸の孤島と
もいへべき集落でした。

大正6(1917)年、須賀(すが)神社の「開けずの箱」から『菅浦文書』と呼ばれる、1000点を超える、文書群が発見されました。文書には、中世から近世に至るまでの、菅浦の歴史が記されておられ、日本の学界を大きく揺るがすことになりました。

『菅浦文書』は惣村活動の様子を知る中世文書として、日本の村落史を辿る上で極めて価値が高いことから、国の重要文化財に指定されています。

山と琵琶湖に囲まれた環境の中で、菅浦の人々は、どのような生活を送っていたのでしょうか。中世菅浦に生きた人々の暮らしを、『菅浦文書』の中から覗いてみましょう。

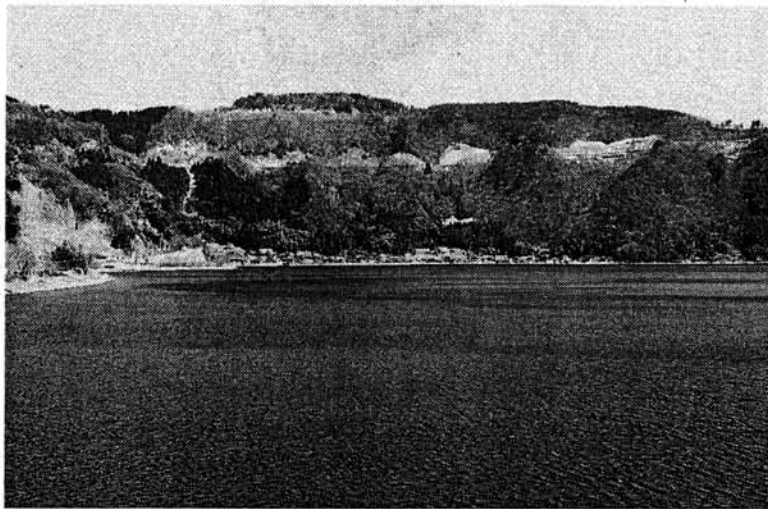
菅浦はもともと園城寺領である大浦の一地域でしたが、平安時代の末期に独立し、後には延暦寺壇那院の支配を受けることになりました。一方で、御厨子所と呼ばれる天皇の御膳を供進する省庁にも属することとなります。高倉天皇(1168~1180)の

とき、住民は、御厨子所から供御人と呼ばれる身分を賜り、特産のビワやヨイを貢納する一方で、湖上の行き来の自由を与えられました。

菅浦の人々は、主に廻船や漁業を生業としていました。が、みかんや綿などを栽培していたことが文書から知られます。山地がほとんどの葛籠尾崎にも、わずかながら耕作地があります。日指や諸河といった土地で、決して広くはありませんが、稲作を行うため船で出向いていたのです。

山地に覆われた周辺地域にとっては、この日指、諸河の地は、農耕が可能な、非常に

菅浦



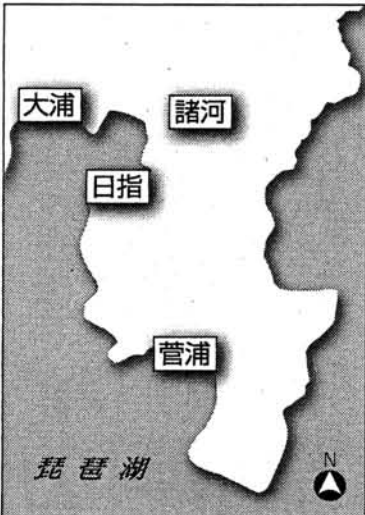
魅力的な土地だったのでしょ
う。特に、周囲にそのような
土地が少ない菅浦にとって
は、集落の生命線だったとい
えます。

ところが永仁3(1229
5)年、この日指、諸河の領
有権をめぐる、隣の大浦と
の争論が始まったのです。こ
の希少な土地を巡る争いは、
田荒らしなどの妨害行為にと
どまらず、やがて多数の死傷

者を出す紛争にまで発展して
しまいます。150年の長き
にわたって続いた争いは、現
地では決着がつかず、ついに
室町幕府の法廷にまで持ち込
まれることになりました。し
かしそこでも双方譲らず、結
果は三転三転します。

そして、文安2(144
5)年から約2年におよぶ訴
訟の末、ようやく菅浦側が勝
訴しました。その際には、公

ま 陸の孤島
に 菅浦
と 菅浦
山に 菅浦
琵琶湖 葛籠尾崎



琵琶湖最北部に突き出た葛籠尾崎。『菅浦文書』には、稲作ができる日指・諸河をめぐる大浦との領有権争いが克明に記されている

この一連の騒動は、住民皆が生き抜くための闘いでした。このような集落規模での団結がやがて、中世特有の惣村と呼ばれる独自の自治能力を備えた集落形態へと発展していきます。

『菅浦文書』の一文に、後世へのメッセージがありま
す。「今後、再び集落の存亡にかかわる事態が発生した際には、住民全員が団結して、全力で立ち向かうことが重要である」と。

(守山市教育委員会 木下 義信)元滋賀県文化財保護協会

陸の孤島 団結で生き抜く